在来道路の整備がなおざりになっているからではなかろうか．あまり大幹線重視の道路体系では，地震がおこったとか，警戒宣言が出て東名が閉鎖されたということがおこった時，どうしようもない事態がおこってしまう．これらの問題も含めて解決してゆくためには道路公団の道路管理という立場だけでなく，もっと広い社会の場での検討が望まれる．

（むらかみ・すみなお　防災都市計画研究所）

●紹介されたOR学会●

この記事は7月31日付，日刊工業新聞に載ったOR学会の紹介です．日刊工業新聞のこの欄は広く科学技術・産業界に関連した由緒ある諸学会を広く紹介しています．担当記者が，学会の広報担当の佐久間庶務理事を訪ね記事にしたものです．本OR誌の歴史について一部誤解はありますが，第三者としての記者の書いた学会紹介として興味深いものと思います．

学会の会員増強のためのタスクフォースも組織されていますが，このような新聞等のマスメディアによるOR学会のPRもぜひ必要のように思われます．これによってORに対して関心をもつ人達の増大をはかり，同時にOR会員増加などを通じ，学会のより一層の発展が期待されるように思います．

日刊工業新聞

科学技術を支える 学会の素顔

□□25□□

日本オペレーションズ・リサーチ学会

応用・事例研究へ変化

経営戦略に近代数学活用

オペレーションズ・リサーチ、略してORは今日、耳なれぬ言葉ではない。しかしORとは一体何かと問われたとき、はたと考えてしまう人も少なくない。日本オペレーションズ・リサーチ学会は二十二年の歴史をもつが、そんなことから、ORをもっとわかりやすい言葉に置きかえられないかという話題が、今なお会員間にかわされている。

第2次大戦中に誕生

ORは第二次世界大戦中に、英米で軍事上の作戦研究の手法として生まれてきた。第二次大戦中、英国軍がドイツのUボートを撃沈する目的で開発された「最大成果を得るための条件を見出すための科学的手法」である。しかし戦後はORが一般社会活動、とくに会社経営、行政の計画策定などに応用できることがわかり、近代数学を武器に活発に活用されるようになってきた。現在では経営の科学、問題解決の科学とまでいわれてきている。

2千名を超す会員

日本オペレーションズ・リサーチ学会（会長小林宏治氏＝日本電気会長）が設立されたのは五七年六月十五日。したがってまだ二十二年のキャリアしかもたないが、世界的にみると、かなり早くにスタートしている。OR理論の研究、手法の開発はもとより、行政や企業経営での具体的課題を解決するために、広い分野の人たちが集まって情報を交換しあい、海外との交流も積極的にして、わが国のORの進歩、発展に貢献しようという趣旨で生まれた。

発表会で徹底論議

発足当時の会員は三百五名。初代会長には久留島秀三郎氏（故人、当時同和鉱業社長）が就任し、以降、財界人を中心にバトンタッチされてきた。会員数は順調にふえ、十年たった六七年には一千名台を突破し、今日では二千百五十三名を数えるに至った。このうち正会員が一千九百五十三名で、内訳は企業に籍を置く人六割、学校関係三割、残る一割は官公庁関係だ。企業では経営企画、調査、生産管理などにたずさわっている人が多く、学校関係では情報工学、応用数学、計数工学、最近では経営工学、都市工学などの分野の人である。

活動の中心は春秋それぞれ行われる研究発表会だが、特徴的なのは、この会場にペーパーフェアという方式を導入していることだ。これは発表会の会場の一部を小さなブース（小間）に分け、ここで発表会参加者が再度、発表者を中心に、突っ込んだディスカッションを展開させる仕組みである。短時間の発表会で不十分な内容は、ここで深く説明されるし、聴講者にとっての質疑は発表者と“ヒザづめ”で論議することで解決されていくというぐあい。

夜店をひやかしでのぞくように、発表のなかで興味のあったものを選び、ブースのなかで論議に加わり、理解を深めていかれるこのシステムは五年ほど前から行っているが「定着し、評判もいい」（佐久間孝・同会理事＝電力中央研究所情報処理研究所所長）という。このほかに特別講演、シンポジウムなども企画される。

刊行物は学会誌「オペレーションズ・リサーチ」（月刊）と論文誌「ジャーナル・オブ・ザ・オペレーションズ・リサーチ・ソサイアティ・オブ・ジャパン」それに特定テーマの研究・調査結果をのせる報文集などがある。いずれも発足当初から発行されている。学会誌は日本科学技術連盟が「経営科学」として出していたものを、七二年に社団法人化されたとき、現在の「オペレーションズ・リサーチ」に変わった。

日常の研究活動は、会員が集まってグループで進める研究部会形式と、企業や官公庁の委託を受けて問題に即した専門家を集め活動する委託研究がある。ちなみに現在開かれている研究部会のテーマは「都市計画と交通」「政策科学」「ゲーム理論とその応用」「地域環境計画マネジメント」など十一ある。委託研究は今年度分はないが、昨年までのものについてみると「都市公共政策のシステム分析に関する研究」「環境影響総合解析システムの設計に関する調査研究」など四テーマ。

小林　会長

ORの真髄はいま

これらの研究の内容は、時代の流れとともに徐々に変化してきている。ひとことでいうと「スタート当時はORの学問的な研究にウエートがあったが、今日では応用面、活用面の研究が盛んになってきた」（佐久間氏）。応用・事例研究が盛んになったことは、これまでのいわば何の制限もなかった時代にくらべ、今日では資源、環境などの面でいろいろな制限が加えられ、しかも不確実性の時代といわれるように社会環境の変動の激しい今、当然といえそうだ。しかし佐久間氏は「まだ活用しきれていない」とし「複雑な社会になればなるほど、ORの真髄ともいえる具体的な問題に対して、科学的にキチッと解決していくことが求められる」ときびしい。

海外のOR関連諸学会との交流も活発だ。欧米の先進工業国で構成する国際OR学会（IFORS）に六一年、正式会員となり、七五年にはわが国でその第七回国際会議を開催した。

社会の複雑化にともなって、そこでの問題解決には広い分野からカンや経験だけに頼ることのない知恵が求められている。近代数学を基礎として、科学的に問題を解決し、戦略を組み立てていこうというORは、コンピュータの発達にも支えられ、より広い学際分野に向けて成長している。

【学会の所在地】 東京都文京区弥生二―四ノ一六、学会センタービル内、☎〇三（815）三三五一

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．